

紫波みらい研究所・山仕事初級教室に参加して

泉 桂子（岩手県立大学准教授）

本号で投げかけられた編集担当からの問いは「森林は社会の一要素」であった。本稿では「森林は社会の一要素」とはどういうことか、という問いに対して、「森林は現代人の心と体の健康を高める」という答えを試論として提示する。この答えはまだ実証まで至っていないが、筆者の参与観察事例から、本当に森に行くと心も体も元気になるのか、ということを考えてみたい。いうまでもなく、今後数十年間は全国的にも、そして筆者が住む岩手県の農村部でも急激な高齢化が進むことが予測されており、地域の住民が元気でい続けることは地域の政策上でも大切なことである。心身の健康の重要性は全国どの地域でも変わらない。森は心身の健康によいと一般的に言われるが、まずは自分が体験しその途中経過を報告する。

事例紹介の導入として、筆者が25年前に在学中の大学院研究室で聞いたエピソードを紹介する。研究室の後輩（だったか先輩だったか）が関東に立地する大学演習林で広葉樹林の択伐の研究をするという。その学生に対し准教授のS先生がこう言った。「そうだね、広葉樹の伐採はもう今見ないと見れないからね」「もう技術的にできる人がいないからね。やるとしたら最後のチャンスだよ」と。ところが、筆者が8年前に岩手に来てみると広葉樹の利用やその生産技術が未だに現役で息づいている。東京の研究室で聞いた話は空耳だったのだろうか。確かに択伐のほうがずっと難しいし、皆伐なら技術的にはより簡単かもしれないが…。

森林面積全国第2位の本県は広葉樹生産量も同様に第2位である。それにしても当地の広葉樹利用の旺盛なこととその多様さに目を見張った。広葉樹とアカマツ主体の原木市場が常設されていること。薪ストーブが農村部はもちろん町中でも使われており、ユーザーの多くは何らかの形で薪づくりにかかわっていること*1。東京電力福島第一原子力発電所事故により大きな被害を被った原木しいたけ栽培も汚染を免れた地域では年数万本の原木を生産している生産者がいること*2。木炭は生産量が減少したとは言

*1 泉桂子・小田中文哉・大塚生美（2018）岩手県紫波町における薪利用の実態と今後の利用可能性。林業経済研究, 64(3):26-35. 2018年12月4日紫波農林公社への聞き取りによる。

*2 同事故による大きな被害を受けた地域の実証的報告としては次。Yamamoto, Shinji and Shitara Misaki (2017) Current Status of the Impact of the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant Accident on Large-scale Shiitake Mushroom Producers and Related Tasks : Ichinoseki City, Iwate Prefecture, as a Case Example. 林業経済研究, 634(2):41-46. 実被害地域の実態は2018年12月3日、I町生産者への聞き取りによる。

え現在も全国トップで、アウトドア愛好家、冶金業、茶道教室、コーヒー焙煎業などからの注文があること*³。広葉樹専門のチップ会社が出荷する製品は高品質の写真用紙の原料になるほか、ウイナーソーセージのスモークに使われていること*⁴。隣県の秋田名産の「いぶりがっこ」という漬物の燻製にも広葉樹が欠かせず、岩手県内からその原木が買われていること。この冬、幸運なことに自分も市民の立場から広葉樹伐採の現場に立ち会うことがなかった。その事例を紹介したい。

本日紹介するのは、岩手県の農山村部でNPO法人が運営するチェーンソーの入門講座に集う人々が、その学びを通して交流し、里山環境の再生にかかわる事例である。岩手県紫波町で行われている「山仕事初級教室」である。入門講座の主催者はNPO法人紫波みらい研究所*⁵（以下「みらい研」）という。みらい研について付け足しておく。特色ある地域活性化施策で知られる岩手県紫波町は2001年から循環型まちづくり政策の一環（あくまで一環であり、これはまちづくり施策の一部である）として、公共建築物の町産材による木質化・木質バイオマスの地産地消を進めてきた。その中で痛感された課題の一つが、「木を伐れる人が足りない」ことであった。みらい研は自ら市民レベルでその養成に乗り出した。これが山仕事初級教室（以下「教室」とする）である。

教室は今年で7年目を迎え、23人で活動している。教室の参加者は町広報やみらい研のブログで募集される。毎年新規申し込み（通称「新人組」）を受け付け、1年間17回（2021年度の場合）の教室を受講する。教室修了者（通称「ベテラン組」）も継続して参加が可能である。参加者の受講動機は様々であるが、新規申込者は屋敷周りの樹木の整理、（夜の部も含めた）交流目的などである。継続参加の修了生は薪ストーブユーザーが多いが、非ユーザーもいる。交流や自らの体力作りを重視している修了生もいる。ストーブユーザーにとっては教室に参加することで原木の入手が可能となることは一定の動機づけとなり得る。たまたまではあるが、イヌ・ネコ・羊・山羊を飼育している動物好きな参加者も多い。「いのち」にかかわることと森での活動は何かしらの共通点を持つかもしれない。参加者の年齢・性別は様々であるが中高年の男性がやや多めである。受講生はみらい研への会員登録として3,000円の年会費、加えて教材費として後述のテキスト代1,200円がある。最低限の道具はみらい研や講師から貸し出されるが、教室が進むにつれ、自費で山道具を購入する参加者もちらほら見られる。このように廉価な受講料、恵まれた環境で受講できる背景にはこの教室が「いわての森林づくり県民税」の補助を受けていることもある。欠席のペナルティなどはなく、受講生が各自のペースで参加している。このように多様で緩やかでかつ自発的なつながりにより、活動が行われている。

さてチェーンソーの技術の教授にあたって問題となるのは、いかに安全に技術を獲得させていくか、である。そのためには講師の質・人数が重要となる。教室で講師を務

* 3 2018年12月14日、岩手木炭協会への聞き取りによる。

* 4 2018年11月22日、I木材工業への聞き取りによる。

* 5 NPO法人紫波みらい研究所「みらい研とは」<http://www.shiwa-mirai.com/about/>

めるのはNPO法人いわて森林再生研究会*⁶（以下「再生研」）のメンバーである。再生研の詳細は紙幅の関係から省略するが、当団体は県内でも一目置かれており、市民レベルの里山管理・安全作業の普及啓発に大きな貢献をしている中核的団体と言ってよい。とにかく、教室で参加者は安全第一で作業することを基本から何回も繰り返し教わる。姿勢はチェーンソーの土台である安定した構えをできるまで練習する、エンジンを始動させるときは半チョークにならないように必ずスロットルを押してチョークを戻す、チェーンソーは肩から上へ上げない、などである。講師は2～3人派遣され、親しみやすい人柄でありながら、技術的なことは安全確実に、時に向上心を育てるように指導している。教室の雰囲気は和やかである一方、安全作業や伐倒作業の振り返りには多くの時間が割かれる。再生研によるテキスト『これならわかる山仕事の手引き』（2019年）も大きな役割を果たす。また、里山保全等の森林内の活動でいかに活動場所を確保し、森林所有者との良好な関係を築くか、もこれまで先行事例等で指摘されてきた*⁷。教室では紫波町内の条件のよい私有林を活動場所としている。条件とは所有者の理解、自家用車でのアクセスの良さと平坦さ、また休憩やたき火のできる空間などである。トイレ、雨天時の座学場所の確保、冬季のアプローチ道や駐車スペースの除雪もみらい研は心を砕いている。所有者や地域の方へのあいさつは常にみらい研から声かけがされる。みらい研がこれまで培ってきた地域社会との信頼関係と、活動場所を提供してくれる森林所有者や教室への地域住民の協力があって教室が開催されている。すなわち、みらい研による教室運営と優れた講師陣が両輪となり、教室が魅力あるものとなっている。

教室は年間を通して5月～2月、春夏は針葉樹人工林、秋冬は広葉樹林で活動する。教室の内容はチェーンソーの使い方に始まり、伐倒・玉切り・枝条整理・運材等の作業



写真1 冬の教室風景

写真2 ベテラン組による集材
左端は体験中の学生

*6 再生研については<http://i-sinrinsaisei.org/>

*7 例えば蔵治光一郎ら『森の健康診断』

に加え、森林について総合的に学べる内容となっている。座学ではチェーンソーの手入れや紫波町内の森林・林業の現状について指導林家を招いて学んだ回もあった。月2回、第2、第4日曜日が活動日で昼休憩を挟み9時～15時までである。また午前1回お茶休憩があり、安全作業のためのリフレッシュの時間であると同時に、手作りのお菓子や保存食の交換や交流の場ともなっている。この時間を利用してチェーンソー目立てをする受講者もいる。森林所有者の声かけで、その方の所有する栗林で栗拾いを楽しんだこともあった。年間通して四季の山の移ろいを肌で感じることも魅力であろう。

最後に、やや主観的となるが、最初に提示した「森に行くときも体も元気になるのか」という仮説について筆者の観察、また自身を被験者として振り返りたい。筆者は50歳を目前にした中高年であり、これまで特別な運動はしてこなかった。高脂血症と軽度のヘルニアがある。筆者以外の教室の参加者、特に修了生は見た目では実年齢よりずいぶん若く、体力的にも筆者に比べ持久力がある（失礼な言い方かもしれない）。加えて見た目だけでなく気持ちや脳年齢も若い（ますます失礼な言い方になっていたらお許しください）。例えば教室の連絡はLINEを基本としており、参加者は高齢であってもスマートフォンやLINEを使いこなしている。伐倒作業を動画で撮影して振り返ったり、時候のあいさつを自作動画で投稿したり、教室外ではYouTubeで伐倒作業を勉強したり、若者とそれほど変わらないITスキルを持っている。これは年齢を重ねても体力のみならず気力が維持されていることの一つの証拠だろう。ただし、これら心身へのよい影響はこの教室によるものか、あるいはこの教室外の要因によるものかは分からない。

被験者としての筆者の健康状態も悪くない。当初は「気力体力もないし、17回も無理…」と気弱になっていたが、これまでの1年弱の教室によって教室開講日の翌日、翌々日は疲労感があるものの腰痛はよくなることを実感し、また教室後の日曜の午後はこれまでおっくうでできなかった家事などがこなせるようになった（ただし、日曜の夜は疲労困憊してパソコン仕事はできなくなった）。運動不足解消と心の健康にはプラスの効果があることが主観的であるが感じられる。なにより、中高年になっても人間は学ぶことができ、また一緒に教室に参加する人がいることの喜びを獲得できた。人から直接技術や知識を教わって、複数の人たちと協力しながら1つの作業をすることは自分の存在を肯定することに繋がった。例えば広葉樹の伐倒は一人ではとても難しい。伐倒する木にロープをかけたり、伐倒方向にロープを引いたり、面倒な枝条処理を一緒にしてくれる方がいるから学ぶことができるとも言える。自分にも「できた」、自分も「他の人の役に立った」と実感することで心に栄養が補給されているのかもしれない。

何より筆者にとって目からうろこが落ちたのは、初めて研究室のS先生の言葉が腑に落ち、血肉になったことだ。「先生、私広葉樹を伐ることの難しさが少しだけですが、分かりました」と今なら言えるだろう。スギの伐倒は広葉樹に比べたら、はるかに簡単である。材がウエハースのように柔らかく、樹形は規則的な円錐形をしている。それでも懸かり木になれば相当の工夫、苦勞をして伐倒する（その技術も奥深い）。広葉樹は、それに比べればずっと堅い。スギがウエハースなら広葉樹は南部せんべいのような。樹

形は不規則で重心がわからない。あるいは重心が明らかに偏っていて、それ以外の方向に伐倒するのはきわめて難しい。広葉樹どうし枝がとなりの樹木に絡んでいることも多い。それでも絡んだ枝どうしをあらかじめ切り落としたり、伐採したい木にロープを掛けたりして伐倒していく。冬季の落葉広葉樹であってもそうなのだ。関東の常緑樹ならなおさら樹形は見えないし、枝の懸かり具合も見えないだろう。

本稿を終えるにあたり、残された課題としてみらい研や教室と地域外との交流、また教室メンバーの教室外（夜の部）の交流がある。これらはコロナ禍のため参与観察を十分行うことができなかつたが、教室で交わされる情報からこれまでかなりの都市部の若者との交流蓄積があり、それが教室の大きな魅力となり、かつ地域外の若者のライフイベントや紫波地域にも大きな影響を与えていることが窺えた。これらの論点については継続して参与観察を行っていく予定である。コロナ禍にあって、このような身近に学びの場、交流の場があることは、森林県・岩手ならではのであろう。加えて野外のオープンな活動のため途切れることなく継続していることは「疎」であるからこそその地域の大きな魅力であり、底力だろう。コロナの時代の今は足元の森林をもう一度見つめなおす好機といえるかも知れない。